

『関係性の歴史学へむけて

——アメリカ植民地期フィリピンの植民地教育をめぐる制度史、史学史、心性史——』

要旨

本研究は題名が制度史、史学史、心性史と述べているように、フィリピンの植民地期の教育がどのような植民地に関する歴史像を作り上げたかを考察することを目的としている。そこで第1章の方法論の検討ではフィリピン史を巡って交わされた論争を取り上げた。この論争は歴史学で使い古された感のある実証主義に対する構成主義という枠組みで理解できるが、植民地期をどのように認識するかという点に関しては興味深い洞察を示している。それは、実証主義的な立場を取り、制度の発展を歴史として理解すると、否応なしに植民地主義賛美へと繋がるという構造である。アメリカ人の植民地官僚は制度の発展に熱心であったし、制度が発展することを植民地主義の業績として描き出してきた。彼らが残した資料こそが「信頼のおける」ものであり、これらの資料から歴史像を描き出すと、すでに植民地官僚の視点や理解の方法が歴史研究者の記述に入り込んでしまう。本研究で初めに行ったのはそのような植民地官僚の植民地認識を明白にすることだった。

第2章ではアメリカ植民地主義が非常に中央集権的な制度を作り上げ、この制度がフィリピン社会に非常に負担の大きなものであり、初期の目標は達成できず、財政が教育の大きな問題であり続けたことを論じた。また、係る制度設計の思想的な源泉が行政進歩主義と呼ばれるアメリカの教育運動にあることを示した。この構造はアメリカ植民地主義のように、教育により文明化しようという意図がある植民地主義においては、植民地支配のためには不可欠であった。細かい命令や学歴を重視することによって、多くのフィリピン人中間層を作り出し、ごく少数のアメリカ人がそれらの中間層を介して自らの意思を教育に反映させることを可能にした。第3章では、教育局が制度や生徒の学力を数値化し、数値を比

べることにより教育の発展を主張していったことを論じた。このような教育の数値化により、教育政策の目標が数値の達成に収斂され、教育局が自らの権限が及ぶ指標の測定を行うという内向きの傾向を生み出し、教育局は様々な批判や制度的限界に対して規定路線に固執しつづけることができた。全学童教育という当初の目的を達成できたわけではないが、官僚が教育を評価し続ける構造により中程度の失敗があっても教育局の根本的な批判や教育の危機には結びつかなかった。

第4章と第5章では、これらの植民地官僚の見解がどのようにしてフィリピン植民地期についての歴史叙述に入り込んでいったかという問いを考察した。第2章と第3章では主に公的文書を分析した。ここでの分析は教育行政における実践を対象としていたが、第4章では様々な立場を取る書き手を分析することにより、植民地教育に関わる言論の外延を示した。教育に関わる言論は多岐にわたっていた。その内もっとも興味深い対立が、植民地官僚ルロイの示した教育によりフィリピン国家を創設すべきという国家創設論に対する、イギリス人女性ダウンシーのフィリピン人は人種・民族として遅れているので、アメリカ式の教育を与えることは無駄であるという消極論であった。しかし、ダウンシーのような見解は支持されることなく、フィリピンの教育における官僚の思考はルロイの示したような問題提起的なものから、フォーブスやヘイドンのような制度擁護的なものへと変わっていく。また、本章では反帝国主義同盟やフィリピン人の見解などを見ていくことにより、学校を作り出し、人々に教育を与えるという植民地主義の営みに対する反論が困難であったことを示した。植民地教育に反対することは教育を与え国家創設に貢献するという近代化の論理を覆さなければならなかった。フィリピンの場合は、スペイン植民地期のヨーロッパ的な伝統がアメリカ植民地主義によって断ち切られ、さらには、世俗主義と平等主義を標榜した巨大な教育制度を前にして、異なった近代化を模索していくことが困難だった。一次資料の中で、アメリカ人によるフィリピン人支配を可能にした大きな論理にはカシキズムと呼ばれるボス支配があった。当初はカシキズムはアメリカ植民地主義が克服すべきフィ

リピン社会の病根として理解されたが、1930年代にはカシキズムがフィリピン人の本質的な世界観であると論じられるようになる。第5章では一次資料の様々な見解がアメリカ植民地期の研究にどのように反映されていったのかを検証した。そこでは、教育は本来社会改革をもたらす手段であったが、カシキズムが社会改革を妨げているので、アメリカ人の恩恵的な意図が実現できないという論理が示されるようになっていた。その中で、フィリピン人の本質ではなく、アメリカ人が平等主義を説きながらも、実際には植民者としての特権に固執していたことが教育の問題であるというマーゴールドの研究は例外であった。本論は、このマーゴールドの視点を発展させ、植民地教育を社会発展の手段ではなく、アメリカ人とフィリピン人が関係を構築する場として捉えた。

第6章では、一方では教育におけるアメリカ人とフィリピン人の関係性を考察した。アメリカ人は教育という恩恵をフィリピン人に与え、生徒であれ、教員であれフィリピン人はその恩恵に感謝するという情念的紐帯によって植民地教育が安定したものとなっていたことを示した。他方、教員という職業の内部構成を論じた。植民地期の教育が政治独立後の共和国の教育と大きな類縁性を持っていることや、アメリカ人教員がアメリカニゼーションと近代化という二つの概念の担い手であることを示した上で、統計資料および教員の名を基に構築したデータベースからフィリピン人教員とアメリカ人教員の客観的な待遇の差について論じた。この分析により、フィリピン人はアメリカ人をモデルとすべきであるが、アメリカ人とフィリピン人の間の差別が教育官僚制度の中枢に根ざしており、保たれ続けたことを明らかにした。第7章では、このような差別にも関わらず、植民地教育に貢献しつづけるフィリピン人教員の心性を分析した。民主主義や教育により地域振興を行おうとする高邁な価値感のみならず、アメリカ人における高い給与に裏打ちされた消費生活やアメリカとフィリピンの間やアジアにおける国際旅行が模範となり、フィリピン人教員の序列ができあがった。上のものは、アメリカ人教員なみの待遇を享受し、下のものは不安定な雇用と低い給与に忍従しなければならなかった。しかし、下層の教員であっても、教員は

コミュニティにおけるより有力な地位に就く機会を得ることもあったし、少ないながらも農村において年金を受け取ることもあった。つまり、フィリピン人教員とは、学歴や専門職歴という植民地主義が公式に認めた社会上昇の道筋を是認し、この道筋を辿ることにより充足感のある人生を歩んでいった人々であった。第8章では、植民地教育を成り立たせるアメリカ人の恩恵とフィリピン人の感謝という情念的紐帯が破綻する事例を分析した。それは1930年の学校ストライキである。暴力論を用い、なぜこの闘争がフィリピンのナショナリズムの伝統に組み込まれず、ほとんどの歴史叙述から排除されてしまったのかを考察した。第9章の結論では、友好という情念的紐帯をシンボルとするアメリカ植民地教育に対して、本論のように批判的に見ることの意義を筆者の体験に照らし合わせて論じた。

これらの章を抽象的に分類すると、第2章と第3章は官僚の思考と教育局の政策、さらにはその教育に対する教育局の公式の解釈を見ていくことにより、植民地教育の実態が構成されていった過程に注目した。第4章と第5章では官僚の思考の形成を考察した上で、今度は構成された実態を根拠としてアメリカ植民地期フィリピンの教育像が植民地主義的な認識を継承していったことを論じた。植民地教育の歴史化についての考察である。第6章、第7章、第8章では、歴史化の過程で何が含まれ、何が排除されたかを見ることにより、フィリピン人とアメリカ人の情念的紐帯から植民地教育を検証しなおしている。この情念的紐帯は今日までの植民地主義の継続性または断絶に関わる植民地教育の重要な遺産であるにも関わらず植民地教育史の中で位置づけられることがなかった。

史料がその時代に対する妥当な認識枠組みを提供すると考える実証主義にせよ、歴史研究は歴史研究者が現在占める立場性とは切り離せず、自らの立場性に意識しつつ歴史を構成するとの前提を持つ構成主義にせよ、歴史が過去に関する語りであることには変わりがない。この観点から見ると、本研究はある時代の特定の事象を論じたテキストとその後の時代におけるその事象に関する説明の間を往還するというより入り組んだ方法を取っている。この方法を取る意義は、認識を拘束する二つの過程を明らかにすることにある。一つ

は教育により特定の心性が作り出される過程であり、もう一つはある事象を語る際には常にその事象についての先行的な認識に参照せざるをえないという歴史化の過程である。

このような研究にあたり、本研究では様々な資料を用いている。1935年もしくは1940年までの公的書類は細かく分析しているし、フィリピン人に関しては二人の個人史を追い、アメリカ人教員に関してはワシントンの島嶼局記録にある個人的な資料を多用した。また、さらにはデータベースを使い、教員の赴任年、勤務年数や場合によっては赴任先、フィリピン官僚職前後の職歴を分析することにより、特定の教員が教員職全体の中でどのような立ち位置にいたかを知る綿密な資料批判が可能になっている。さらには、詩や短編小説、風刺画などを利用し、フィリピン人、アメリカ人双方の心性やその心性から生じる植民地認識を分析している。